平成２８年度　香川県中学校教育研究会特別支援教育研究大会

事前研究の手引き

香川県中学校教育研究会特別支援教育研究部会

　　　　　　（さぬき・東かがわ支部）

１　研究主題

　　　　　　　　長期的な視野に立ち、共に高め合う特別支援教育をめざして

　　　　　　　　　―　一人一人がいきいきと輝く教育活動のあり方　―

２　研究主題について

　　さぬき・東かがわ地区では学校の統合が進み、以前は９校あった中学校が現在では６校になった。各校ともに複数の特別支援学級があり、今年度は計１５学級設置されている。知的障害と自閉症・情緒障害の学級は全ての学校に設置されており、数年前に比べて知的障害の生徒はやや減少しているものの、特別支援学級生徒全体の人数は大きな変動がない。自閉症・情緒障害学級在籍生徒数は約半数である。

　　また、平成２７年度の特別支援学級卒業生徒の進路状況は、高校進学８名（公立高校［全日制４名］、公立高校［定時制２名］、私立高校２名）、特別支援学校高等部８名である。このように高等学校へ進学する生徒は年々増加傾向にあり、それぞれの生徒への適切な進路指導やコミュニケーション能力を高めるための指導は、特に重要になってきている。

　　さぬき・東かがわ支部では平成２４年度に県研究部が設定したものと同じ主題を掲げ、研究を進めてきたが、生徒一人一人が中学校在籍中だけにとどまらず、将来においても上級学校や社会生活の中で、いきいきと輝けるようにとの願いから、平成２６年度より社会性を育むための指導並びに個に寄り添った進路指導を中心に研究を進めてきた。

３　研究概要

（１）社会性を育むための指導

　　特別支援学級の生徒の特性から、周囲の人たちとの関わり方について、どのように接していけばよいかが分かりにくかったり、自信がなかったりする場合が多く見られる。そこで身近な人たちとの関わり方など社会性を育むことをめざして、その基盤となる心の成長を促すため、道徳の授業を中心とした実践の中で研究を進めている。その実践は特別支援学級でのものだけにとどまらず、通常学級における支援を要する生徒も含め、障害のある生徒と他の生徒がともに学ぶことを検討し、共生社会の形成・インクルーシブ教育の実践につながるものと考える。ここでは、各校生徒の実態や校内体制整備の状況が異なる中、研究授業を実施したり実践事例を持ち寄ったりして研究してきたことをまとめた。

（２）個に寄り添った進路指導

　　　生徒は中学校を卒業するときだけでなく、将来においても様々な人生の岐路において自己決定をしていかなければならない。心身両面にわたる発達が著しい中学生期に、上級学校を知ることや職場体験学習など中学校を卒業するときの進路指導だけでなく、その後いろいろな場面での自己選択や自己決定が主体的にできるようになることをめざして指導することは、将来の生活を豊かなものにしていく上でとても重要だと考えている。生徒が自分のことを知り、社会や他の人との関わりを考えて、自信を持って判断や行動ができることをめざした指導・支援に視点をあてた実践例をまとめた。

４　問題点

（１）生徒の個性はさまざまで、特性がよく似た生徒だからと同じような指導をしても結果は大きく異なることがある。

（２）特別支援学級での道徳や学級活動等の授業では、積極的な姿勢で取り組むが、交流の授業では十分な参加に至らず、理解が不十分であったり、意欲面で消極的になったりする。

（３）体験を多くしても十分な効果が表れにくかったり、結果が分かるまでに長期間が必要だったりして検証が難しい場合がある。

５　今後の研究課題

（１）卒業後、生徒一人一人が自立してよりよい生活を送るためには、どのような力を身につけることが望ましいか。また、そのためにどのような実践をしていけばよいかについて継続して研究していきたい。

（２）生徒の実態に応じた通常学級との交流及び共同学習のあり方や目標達成のための様々な工夫に関する研究を重視し、学校全体でインクルーシブ教育システムの構築の視点に立った教育活動改善を推進したい。

（３）研究推進に関して、各教科研究会などとは異なり、毎年、研究部の会員の入れ替わりが大きく、継続した研究を進めることが難しい。